

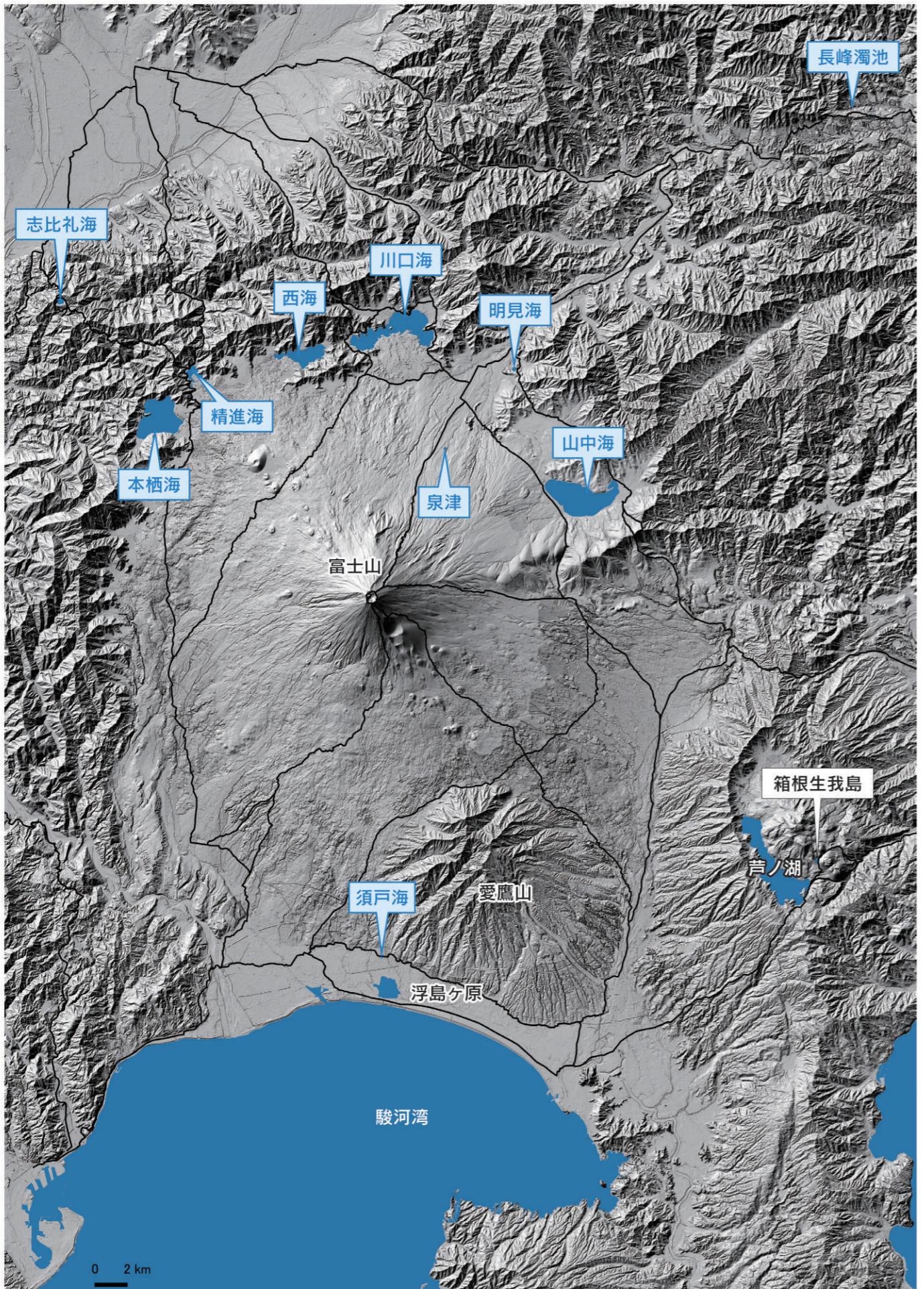
令和 3 年度 第 1 回企画展

富士八海を巡る



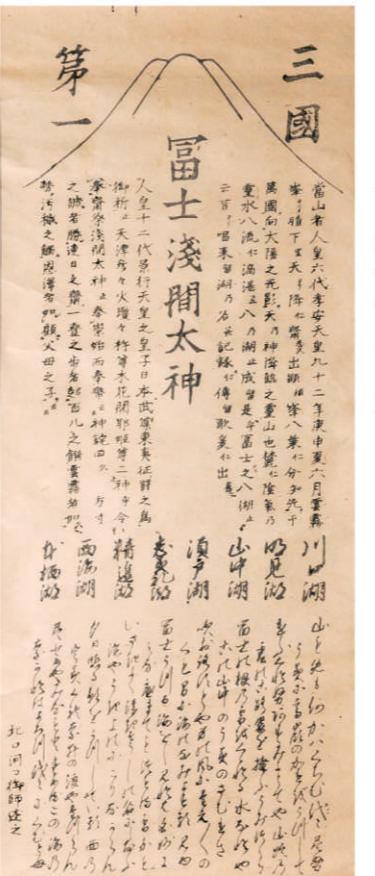
山梨県立富士山世界遺産センター

内八海地図



国土地理院「陰影起伏図」に加筆した。(村石眞澄作図)

※本書では「内八海」の名称の表記は、原則として『甲斐国志』に記載してある表記を使用する。



1 富士浅間太神掛物

年未詳
縦66.0cm×横27.1cm
川口御師が出したもの。富士山の麓に、「陰気の靈水」が堪って八つの湖が出来たと記す。下部には川口・明見・山中・須戸・志美(比)礼・精進・西海・本栖の八湖の各御詠歌を載せる。



2 河村岷雪画「大石 郡内」(『百富士』第二冊)

明和4年（1767） 縦26.0cm×横20.9cm
江戸の画家・河村岷雪が描いた『百富士』の構図は、後世、葛飾北斎の『富嶽三十六景』などに影響を与えた。本図は大石（富士河口湖町）から河口湖を俯瞰した構図をとり、鵜ノ島や産屋ヶ崎を描く。

富士山の北麓に点在する五つの湖水は、景勝地として広く知られると同時に、世界文化遺産「富士山」の構成資産・構成要素となっています。一般に「富士五湖」の名で総称されますが、この名称の起こりは、1920年代まで下るようです。山内や山麓に観光開発の波が及ぶなかで、定着していったものと思われます。

しかし、富士五湖はこの名称が生まれる以前に、富士山やその周辺に修行の場を求めた行者にとって、巡拝の対象、修行の場でした。信仰心をもって人々が巡った湖水、すなわち「信仰の対象」としての性格をもっていました。

文化11年（1814）に幕府に献上された甲斐の地誌『甲斐国志』は、山中海（山中湖村）・明見海（富士吉田市）・川口海・西海・精進海・本栖海（以上、富士河口湖町）・志比礼海（市川三郷町）・須戸海（静岡県富士市）を「富士八海」として挙げています。史料によっては須戸海ではなく泉津（泉瑞、富士吉田市）、あるいは長峰濁池（上野原市）を加える場合もあります。

これらの富士山麓に所在する湖沼は、やがて「内八海」と呼ばれるようになります。これは、富士山を大きく取り巻く湖沼を「外八海」と称するようになったことに対応したものです。万延元年（1860）に刊行された案内記『富士山道知留辺』に載る「外八海」は伊勢の二見海（三重県、二見浦）、近江の竹生島（滋賀県、琵琶湖）、相模の箱根湖（神奈川県、芦ノ湖）、信濃の諏訪湖（長野県）、上野の榛名湖（群馬県）、下野の日光湖（栃木県、中禅寺湖）、遠江の佐倉湖（静岡県、桜ヶ池）、常陸の鹿島湖（茨城県、霞ヶ浦）です。

本企画展では「内八海」について、その巡拝ルートや信仰について取り上げてみました。富士山の行者は「内八海」でどのような宗教行為をしたのでしょうか。また、「内八海」をどのように巡ったのでしょうか。これらの問題を通して、富士信仰の一つのあり方について考えてみたいと思います。イコモス（国際記念物遺跡会議）より示された「下方斜面における巡礼路の特定」という課題に対する回答の一部にもなりうるものと考えます。

令和3年（2021）7月

山梨県立富士山世界遺産センター

「富士八海」の成立

富士山を取り巻く湖沼を「八海」と呼ぶようになったのは、いつ頃だろうか。文献上では資料3「富士山縁起」が最も古いものだろう。弘治4年（1558）に書写したとする奥書をともない、下のように富士山頂上の「八葉」に坐す神々の本地仏の「御手水」として八海を位置づけている。八海は頂上に参拝する際の身を清める場所として認識されていたのである。

「富士山縁起」を書写した圓瓈は、当時、武藏国足立郡箕田郷龍珠院（埼玉県鴻巣市）の隠居であった。龍珠院は真言宗寺院で、圓瓈は同院の第9世とされる。縁起は富士山を、「外院ハ金ノ大日、内院ハ胎ノ大日、両部不二一軀（体）之形也」と、密教の教主・大日如来を中心とする金剛界・胎蔵界の両界曼荼羅に見立てている。12世紀に末代上人が富士山頂に大日寺を建立した後、富士山の祭神・浅間神の本地は大日如来とされた。また江原浅間神社（南アルプス市）の「浅間神像」を納めていた宮殿の後壁の墨書銘（文亀4年 [1504]）は、浅間神の本地を薬師如来とするが、その書き出しには「それ浅間大菩薩は九山八海の体を為す」（読み下し）とある。九山八海とは須弥山を中心として、鉄圍山を外囲とする仏教の世界觀である。この両山の間には七つの山、七つの内海があり、外海として環海があるという。富士八海はこうした考えに基づき、富士山を須弥山に見立て駿河湾を外海として設定されたのだろう。そして、神仏習合の中で頂上の御手水として位置づける考え方方が生じたと考えられる。



3「富士山縁起」(部分)

個人蔵
弘治4年（1558）
縦25.0cm×横274.5cm

4月5日に龍珠院隠居の圓瓈（76歳）が書写し終えたもの。八海についての記述があるが、基となるテキストにそれが書かれていたのだろう。冒頭部分が欠けているが、「御池」で垢離（こり）を掻（か）くことが、頂上の「八葉九尊」の「仮果」に到るためには必要だと述べている。「凡夫ノ河」（凡夫川）、「大宮」など駿河の地名が登場する点に、駿河で編まれた原本の存在を想定できる。

第八ノ峯ハ管根ノ權現、本地文殊菩薩、		第七ノ嶺ハ三嶋ノ大明神、本地宝勝尊、	第六ノ嶺ハ鹿嶋大明神、本地藥師	第五ノ嶺ハ白山權現、本地弥勒菩薩、	第四ノ嶺ハ日吉山王、本地觀音菩薩、	第二ノ嶺ハ熊野ノ權現、本地阿彌陀如來、	第一ノ嶺ハ伊豆ノ權現、本地阿彌陀如來、	山中之海ミ	八葉九尊ト之者	(略)
御手水ハ須渡ノ湖	御手水ハ本巣ノ海ミ	御手水ハモトス	御手水ハモトス	御手水ハカシマ	御手水ハカハシ	御手水ハアスミ	御手水ハアスミ	御手水ハカハシ	御手水ハカハシノ湖ミ	

富士講と「富士八海」

九山八海の考えから成立したと思われる富士講が盛んに結ばれるようになると、その信仰のルーツとされた伝説的宗教者・長谷川角行が「大行」を修した聖地として巡拝の対象となつた。下の表は史料に記載される八海についてまとめたものである。この内、②～⑤には角行が「百日百夜」の行を修した場所で、後に「内八海」とよぶ湖沼が記されている。②③⑤は「近江水海」「箱根生我嶋」を加え、④はさらに伊勢の光輪寺池と二見浦、そして中禅寺湖・諏訪湖を含めて「八海」としている。「内八海」と「外八海」は特に区別していない。また天正8年（1580）に角行が自ら書いたという「八海水行次第」には、明見・舟津・山中・西・精進・本栖・吉原と近江・箱根が記されている（岩科小一郎「創成期の富士講」）。

江戸時代中期以降になると、角行の大行の場と明記しない形で八海が紹介される（⑥～⑨）。「内八海」もこの時期にはほぼ固まる。⑥⑦は吉田御師に伝來したもので、「仙水」（泉津、泉瑞）が八海の一つとして登場する。⑦は八海に八大龍王が、例えば山中海には「作薬龍王」といった具合に当てはめられている。19世紀以降の⑧⑨では、内八海に須戸海・泉津のいずれを入れるかという相違があるが、この点は、浮島ヶ原と関連させて後述する（p 9-11）。

②「御大行之卷」や③「角行藤仏記」によると、角行は人穴で仙元大菩薩より、角柱の上につま先立ちし、昼夜3度ずつ水垢離を掻き、白糸ノ滝で身を清めるようにとお告げを受けたという。その後、「父母の恩徳」に報いるべく八海での大行を命じられる。八海での大行をそれぞれ終えるたびに、角行は仙元大菩薩から病の「風先休」や「御水洗之文」、風送りの「御文句」といった教えを直伝された。このように八海は角行の宗教的能力を高めた水場として信仰の対象となり、後に内外の八海が整えられて行く中で、富士講の巡拝地として世に広まるのである。

〔表〕 史料にみる富士八海（内八海）

①「富士山縁起」 弘治4年（1558）		山中之海	阿栖ノ湖	河口ノ湖	西之海	水比礼ノ海	精進ノ海	本巣ノ海	須渡ノ湖	
②「御大行之卷」 元和6年（1620）		山中之池	穴済之海		西之海		生次之海	本須之海	腑度之海	吉原浮島
③「角行藤仏記」 元和6年（1620）		山中三ヶ月 の水海	穴海		西の湖	志比礼	生死湖	本須の湖	禱度の湖	吉原 浮島ヶ原
④「水行之卷」 年未詳		山中の水	あすみ	ふなつ	にしの海		しやうじ	もとす		よしはら うき嶋
⑤「日之御卷」 年未詳		山中の湖		舟津の海	西の湖		庄司の海	本須の海	須度の湖	吉原浮島
⑥「三十一日の御卷」 享保18年（1733）	仙水出口	山中の海	明見野海	舟津野海	西野海	志びれ野海	庄司の海	本巣野海		
⑦「真理教誨奇瑞捨壽祝全」 安永4年（1775）	仙水	山中	明見	川口	西野海	志毎蓮	精進	本栖		
⑧「甲斐國志」 文化11年（1814）		山中海	明見海	川口海	西海	志比礼海	精進海	本栖海	須戸海	
⑨「富士山道知留辺」 万延元年（1860）	泉津湖	山中湖	明見湖	川口湖	西の湖	志比礼湖	精進湖	本栖湖		
	泉津	山中海	明見海	川口海	西海	志比礼海	精進海	本栖海	須戸海	浮島

※②③は写本であり、実際の成立年代は江戸時代中期以降に下る。

～山中海の「鯉奉納」碑～

内八海の一つ山中海（山中湖）の南西岸に「鯉奉納」と刻まれた石碑が立つ。この石碑は享和元年（1801）に、吉田御師・中雁丸の旦家、武藏の富士講・丸正講が建立したものである。もともとは湖岸からやや西に離れた観音堂の前に建てられたが、明治維新の際に山中の浅間神社の入口に移設、その時に二つに折れ、神社参道に埋もれていたのを昭和56年（1981）に再発見、つなぎ合わせて現在地に改めて建立された。碑を建てた丸正講は17世紀後半に、埼玉郡正能村（埼玉県加須市）の青木半右衛門（一行初山）が結成した。

碑にある「鯉奉納」の意味するところを考えてみたい。食行身禄の系譜を引き「不二孝」（不二道）を開いた小谷三志は、文化5年（1808）の内八海修行の際に、山中海に棲む魚として、鮒・あかはら・雑魚・やまこ・うぐいなどを挙げているが、鯉は含まれていない（『裾野八湖・豆州修行記』）。昭和13年（1938）段階ではわかさぎ・鯉・うなぎなどが加わっているので（『南都留郡郷土誌』）、鯉は人の手により放流されたと判断できる。ちなみに三志は川口海（河口湖）には2尺（約60cm）ほどの鯰がいて、それは信濃の諏訪湖から持ち込まれたものと述べている。寛政年間（1789-1801）には、川口海から諏訪湖へ小海老、諏訪湖から西湖（西湖）へ鯉・鯰が放流された（山田茂保『諏訪史概説』）。

山中海の「鯉奉納」は諏訪神社と関連する可能性がある。碑からほど近いところには安産守護の信仰を集めている山中諏訪神社があるが、信濃の諏訪大社の上社・下社では、毎年8月に執行される御射山祭の際にうなぎ・どじょうを川や池に放つ。これは2歳児の健康祈願として行われるが、下社では神池（放生池）に放すので、放生会に由来する可能性もある。また上社では生きている鯉を神饌として献げる。山中海の「鯉奉納」には、このような諏訪信仰の神事が反映されていたと思われる。



富士講「鯉奉納」碑

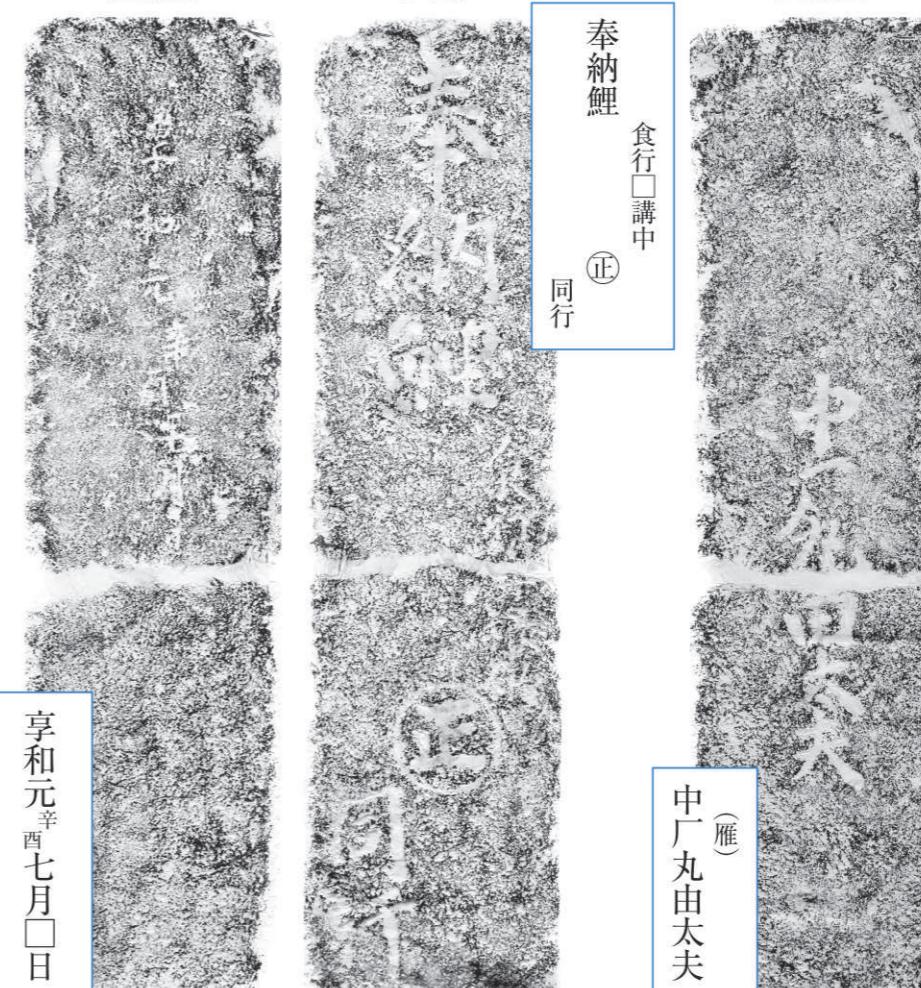
山中湖村山中
山中湖村指定文化財

観音堂前から山中の浅間神社入口に移転し、その後現在地に移った。碑に刻まれた吉田御師・中雁丸は、丸正講を旦家にしていた。



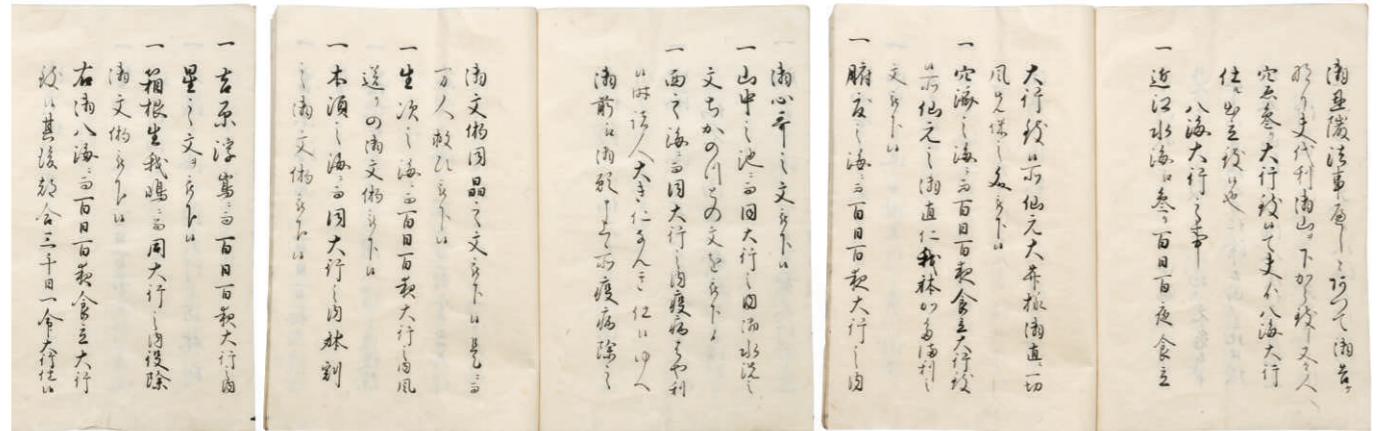
観音堂
山中湖村山中
すぐ左には山中小学校がある。
右手に下ると湖岸に出る。

(左側面) (正面) (右側面)



6富士講「鯉奉納」碑拓影

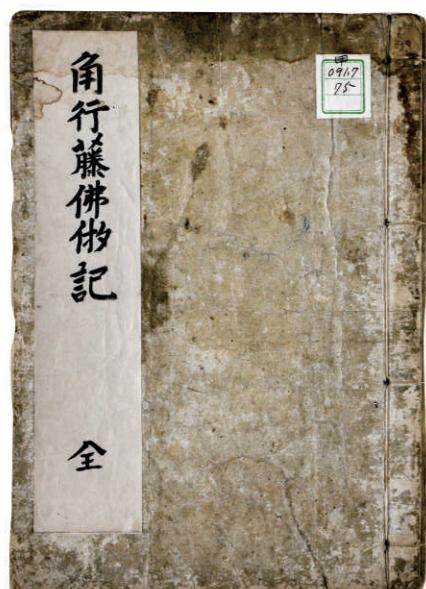
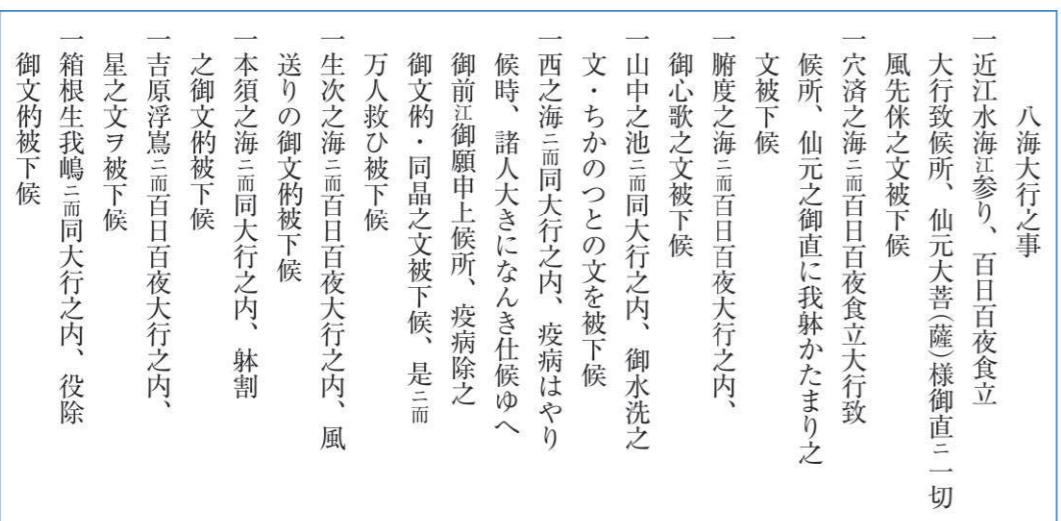
原碑造立：享和元年（1801）
各面：全高85.0cm、全幅21.0cm



4「御大行之卷」(写本)

書写年代未詳

富士講の祖とされた長谷川角行の事績などが記されている。江戸時代中期以降に関東で富士講が盛んに結ばれると、講祖角行の伝記のさまざまな写本が講中で出回るようになる。本資料は吉田御師・小猿屋に伝來したもの。「八海大行」を修することで、角行は仙元大菩薩より「風先伴」や「御文句」を授かり衆生救済に向かう。西海周辺では「疫病」が流行していたが、授かつた御文句により万人を救ったことが書かれている。

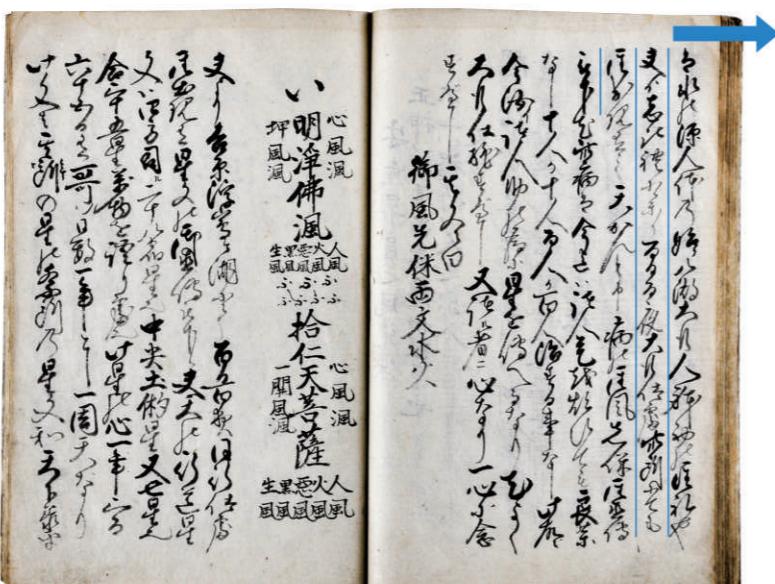


5「角行藤仏仰記」

書写年代未詳

「御大行之卷」の異本。角行の弟子・日行日旺（にちぎょうにちがん）が、元和6年（1620）10月付「御直伝」の書写本をさらに写したもの。本文の写真は資料4「御大行之卷」にはない志比礼海での大行を記した部分。

山梨県立博物館蔵甲州文庫



夫より志比礼に参り、百日夜大行仕候處、此所にても
(仙元大日) 御出現有之、天かんと申病の御風先伴御直伝
被下…

水行の場

江戸方面から甲州道中・富士道経由で吉田へやって来る道者は、下吉田（富士吉田市）の愛染地蔵堂前にある精進ヶ池で水行を修した。江戸や関東の富士講の教えの中では、長谷川角行や食行身禄が水行を重視したことが知られている。角行が八海で水行を実施したのは、煩惱をなくし、衆生を救うためだった。身禄は身を清めることについて、登拝前には内面からの「垢離精進」が必要だと述べる。富士講のこのような教えから、水行の場としての八海が世に広まった。

一方、西国ではまた違った様相がみられる。文化3年（1806）刊の『諸国国会年中行事大成』によると、京都では5月25日から6月2日まで「富士垢離」が行われていた。これは富士行者の山伏が、期間中毎日、川辺で垢離を搔き、富士権現を遙拝するもので、富士山への登拝と同じ効力があるととらえられていた。この行事には一般人が交じることもあった。元禄5年（1692）刊の浅井了意著の仮名草子『犬張子』には、「近頃、京でも田舎でも富士垢離ということが流行っている」とあるので、東国における富士講隆盛以前から、水行を重視する富士信仰の形がみられた。

富士垢離のための施設を「行屋」といい、正徳5年（1715）当時、洛中で56軒、洛外で23軒を数えた（「山伏富士垢離之事」）。この行屋には、駿河側の登拝拠点の一つである村山口の三坊（大鏡坊・辻之坊・池西坊）が、京都の本山派修験の総本山・聖護院の名において認可を下した。伊勢では富士山に関わる祭礼で、水垢離を搔く地域があり、尾張の知多半島では、富士詣に先立って、海で垢離を搔く「浜下り」を行う村もあつた。駿河側では本宮浅間大社の湧玉池、村山の龍頭池が水行の場として知られ、村山に到るルートの凡夫川にも「垢離場」があった。水行について江戸富士講と修験による東国と西国の認識の違いは、八海の成立や展開にも関わって来る問題である。



切原浅間山大祭の水垢離 三重県度会郡南伊勢町
北出正之氏撮影

伊勢の内陸部に位置する切原の浅間講は、毎年7月第一日曜日に地内の浅間山へ登拝する浅間山大祭を執行する。祭礼当日の一週間前からショウジンド（精進入）は朝昼夜と水垢離を搔き、当日朝も垢離を行う。



愛染地蔵堂 富士吉田市下吉田
平成6年（1994）撮影

月江寺の末庵。文明14年（1482）の創建という。江戸時代には富士道者に安産と火伏の護符を出していた。



湧玉池 富士山本宮浅間大社境内（静岡県富士宮市）
国指定特別天然記念物
富士山の伏流水を水源とする。かつては上池・下池に分けて、上池のみを「湧玉池」と呼び、下池からの流水は「御手洗川」といっていた。

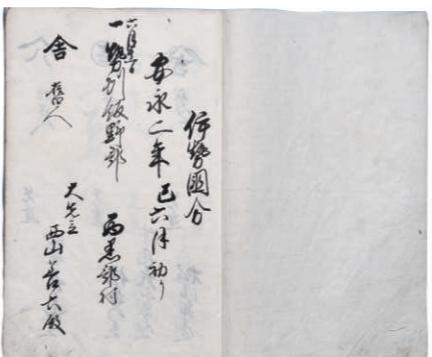


凡夫川 静岡県富士市
垢離場は潤井川（うるいがわ）との合流点付近にあったと考えられる。

須戸海と泉津

p 5の〔表〕を見てほしい。食行身禄の教えを伝える⑥の「三十一日の御巻」以来、内八海の一つとして「仙水」「泉津湖」が登場する。泉津（泉瑞）は吉田口登山道を東に外れた所にあり、現在、水場はないが「泉瑞水神社」が祀られている。また〔表〕⑧の甲斐國の地誌『甲斐国志』は泉津ではなく須戸海（須津湖）を八海の一つとしている。他の甲斐の地誌は八海として須戸海をどのように取り上げているか。天明2年（1782）の序文がある国学者・萩原元克著の『甲斐名勝志』は須戸海を挙げ、「一説」に長峰濁池（上野原市大門）とする。漢学者・大森快庵の嘉永2年（1849）の没後に刊行された『甲斐叢記』は逆に長峰濁池を八海とし、「一説」に須戸海という。〔表〕⑨の案内記では須津海が田地にされたため、新たに泉津が八海に加わったと説明している。泉津は身禄以後、江戸を中心とする富士講の隆盛の中で八海の一つになったといえる。一方、須戸海はその西岸が東海道吉原宿（静岡県富士市）から須山口や須走口に至るルートの途上に当たるので、須戸海を八海とするのは駿河側の考えによるものだろう。

そして泉津はどのような場所だったのか。寛文12年（1672）の『泉津記』によると、泉津は富士で巻狩をした源頼朝が「箭弩」（石弓の矢）で突いたところに出た湧水を起源とする。『甲斐国志』は「泉津水」をして、泉津からの湧水が新屋村（富士吉田市）と諏訪森（同市上吉田）の間を流れ下るという（卷37）。夜になると水量が倍増するので「夜倍の水」の別名があるともいわれる。現在の泉津の地には寛政12年（1800）に江戸の山崎講、弘化4年（1847）に藤沢宿（神奈川県）の元一講が建てた富士講碑がある。

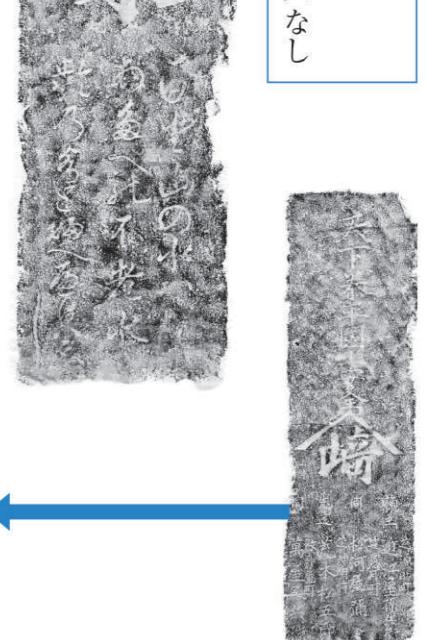
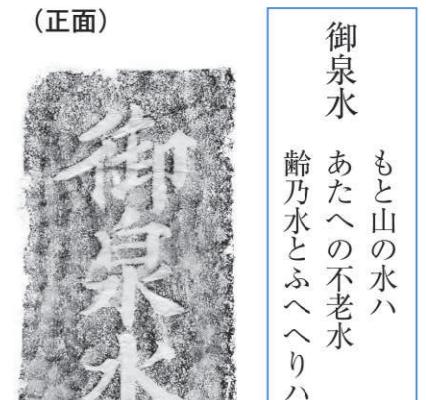


7「伊勢国道者帳」 個人蔵
安永2年（1773）

須走口の御師・米山氏（久大夫）が安永2年から嘉永5年（1852）にかけて、伊勢から来る道者的人数などをまとめたもの。須走口にとって西国からの登拝者向けに、須戸海が八海の一つであることは重要だった。写真は冒頭部分。伊勢国飯野郡の西黒部村（三重県松阪市）から道者24人を受け入れているが、講印から同村では江戸の富士講・山吉講の枝講が結ばれていたことが分かる。



泉津富士講碑（山崎講）
寛政12年の御縁年に、江戸山崎講が造立。正面に「御泉水」と大きく彫り、泉津が江戸富士講にとって重要な巡拝地だったことを示している。



8泉津富士講碑拓影

原碑造立：寛政12年（1800）
各面：全高95.0cm、全幅30.0cm

天下泰平国土安全（崎

先達	同	願主
数奇屋町	芝神明町	芝源助町
万屋久兵衛	松河屋彌七	近江屋孫兵衛
荒木松五郎		



泉津富士講碑 富士吉田市上吉田
左が藤沢宿の元一講、右が江戸の山崎講が建てたもの。

御泉水 もと山の水ハ
齢乃水とふへりハなし

～二つの須戸海～

須戸海はどこにあったのだろうか。万延元年（1860）の『富士山道知留辺』では、「須戸湖」は「浮島ヶ原の浮島が沼なり、今ハ田地となりて僅にその形を存するのみ」とある。これより前、駿府の町人学者・新庄道雄が文化10年（1813）前後に著した『駿河国郡名考』には、「浮島」に「須度の湖といふあり」と載っている。また、文久元年（1861）序文の『駿河志料』は東柏原新田（静岡県富士市）の柏原沼を、古くは「須戸湖」とも「須津湖」とも呼び、沼津辺りまで連なる湖として説明している。東海道の原宿（静岡県沼津市）から吉原宿（富士市）にかけて、その北側の浮島ヶ原一帯に須戸海があり、浮島沼や柏原沼とイコールであると考える向きがあった。しかし、p 5 の〔表〕②③⑤からも分かるように、長谷川角行の水行場としては、吉原の浮島と須戸海は別の湖沼として書き分けられている。浮島ヶ原一帯は広範囲な低湿地帯のため、東側を浮島沼・富士沼、西側を須津沼・須津広沼・柏原沼などと称したらしい（『静岡県史』通史編3）。延宝5年（1677）には「須津広沼」が新田開発の対象になっている（『静岡県史』資料編11）、当地には盛んに開発の手が入ったが、しばらくするとまた湿地になり、それを再開発することをくり返したという。このような土地柄で須戸海は八海の一つとしてどのように認識されたのであろうか。

浮島ヶ原は鎌倉時代には東海道の紀行文に記述があるように（『東関紀行』）、古くから富士山・愛鷹山とセットになった景勝地として知られていた。元禄3年（1690）刊の『東海道分間図』、宝永年間（1704-11）刊の『諸国安見廻文之絵図』には、東海道の北側に大きな湖沼が描かれているが、その名称は前者では「沼」、後者では「池沼」と固有名詞が書かれていない。湿地が広がっていて、その中にある沼の区別が判然としなかったのであろうか。



9 「駿河柏原沼ノ富士」絵葉書

個人蔵
年未詳

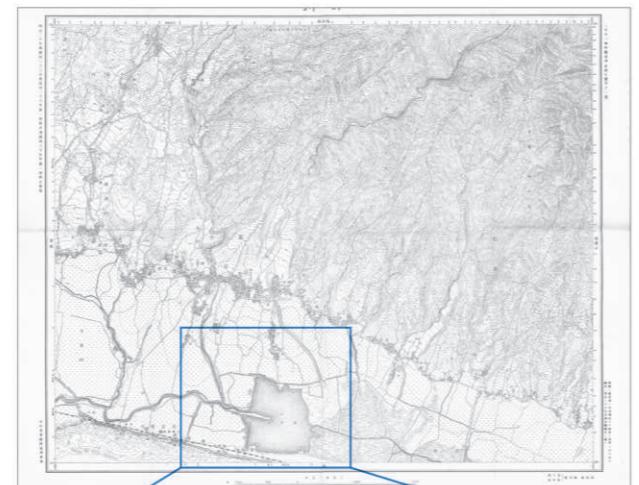
富士山を背景に、舟が帆を上げている。『駿河志料』は柏原沼を古くは須戸海といったとする。東・中・西の「三柏原」と沼田新田（いずれも富士市）には合わせて100艘余りの川舟があり、漁業が盛んだった。



浮島ヶ原

浮島ヶ原自然公園（静岡県富士市）

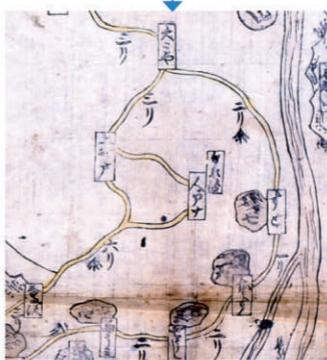
低湿地帯であるため、浮島ヶ原の開発は困難を極めた。



10 二万分一地形図「鈴川」

個人蔵
明治35年（1902）

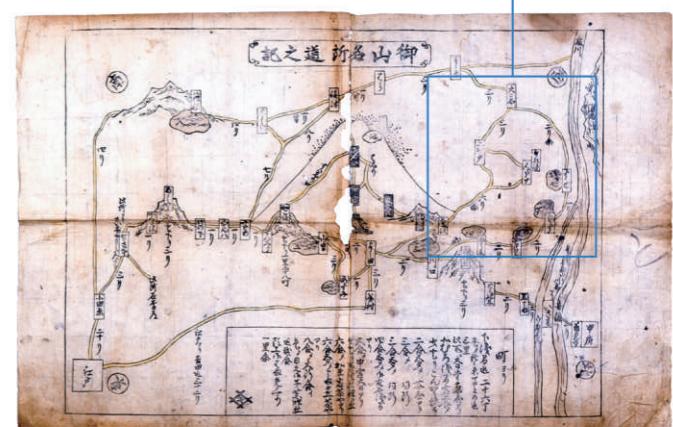
縦45.9cm × 横57.7cm
帝国陸地測量部が発行したもの。浮島ヶ原の西端にある湖沼を「須津沼」と明示している。



12 「富士山禪定図」

個人蔵
天明年間（1781-89）

縦38.1cm × 横53.2cm



11 「御山名所道之記」

個人蔵 写真提供：ふじさんミュージアム
江戸時代中期カ



13 「駿州吉原宿絵図」

個人蔵
文政10年（1827）



富士山に駿河側から登拝する道者によって、須戸海はどう認識されていたか。江戸時代中期頃のものと考えられる「御山名所道之記」（資料11）は、内八海を示した北口の案内図としては最も古い。八海の第七番「すど」が本栖海と大宮（静岡県富士宮市）の間に描かれている。志比礼海を記載せず、箱根を八海に加えていることと合わせて、当時の北口の八海に対する認識を示している。富士川東岸の「水神」から大宮・村山へ向かう登山道を示す天明年間（1781-89）の「富士山禪定図」（資料12）は、「浮嶋原」の所に大きく「富士八海内ストノ池」を描く。大宮・村山は、須戸海は八海に含まれる巡拝地で、それは浮島ヶ原にあったと認識していた。

文政10年（1827）版の「駿州吉原宿絵図」（資料13）は、吉原宿を起点に富士山へのルートが示されているが、ここでは「浮島原」と「八湖ノ内須津池」を別々に描く。西国から須山口・須走口を目指す道者のために、浮島ヶ原とは別の場所に須戸海があることを強調したものと思われる。

実際に訪れた道者は須戸海をどう見たか。文化5年（1808）に内八海修行に出た小谷三志は、須戸海は「沼」で周囲は田畠という（「裾野八湖・豆州修行記」）。文政6年に大坂から登拝した芙蓉亭蟻乘（p18）は、須戸海は浮島ヶ原の原中にあり、周囲は広いと述べる。大坂生まれで、駿府御蔵方などを務めた羽倉簡堂は文政10年、登拝後に伊豆に寄っての帰り道に、沼津から柏原に向かうと村の右に須戸海があり、これは富士八海の一つであると記している。須戸海は浮島ヶ原にあるというのが大方の認識だったのだろう。

現在、「須津湖」とされている場所が富士市中里地区の住宅街の中にある。周囲100メートルばかりの半円形の小さな溜池である。かつて「西池」とか「宮組池」と呼ばれ、埋め立てる前は現在の倍の大きさがあったという（『郷土誌須津』）。この溜池は、すでに延享3年（1746）の中里村絵図に「満崎溜井」の名称で記載された。

溜池の北側には愛鷹山南麓を行く根方道があり、その道を挟む屋敷内の湧水から水が流れ込んでいた。屋敷にも湧水がつくる小池があり、それを須戸海（須津湖）といった。同家の屋号は「甚太川」で、湧水池から西池に向かって掘った水路も甚太川と呼ぶ。屋敷内の池の前面に斎藤応輔の句碑が立っていた（資料14）。明治33年（1900）、斎藤がこの場所を富士八海の一つとして建立したという。池は製紙工場の取水により涸れてしまったようで、句碑も道路に面した場所に移された。すぐ近くには中里八幡宮がある。別当は多門坊という修験が代々務めた。この多門坊に出入りする修行者が中里の須戸海で身を浄めたと伝えられている。



左：国土地理院「陰影起伏図」に加筆した。 右：国土地理院「基盤地図情報」により作成した地図に加筆した。（ともに村石真澄作図）

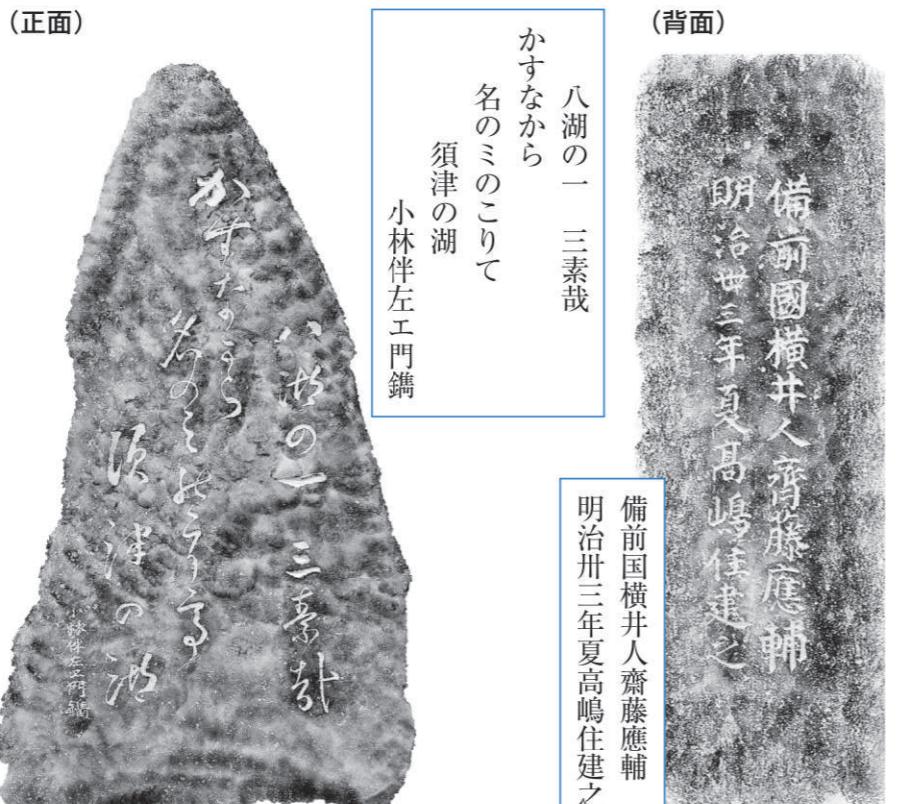
左の地図の「須津沼」は、明治35年（1902）刊陸地測量部の地図（資料11、p10）の表記による。その須津沼と八海の一つと考えられる須戸海との位置関係を示した。右は須戸海付近、現富士市中里の地図である。湧出した須戸海の水は甚太川を介して西池（宮組池）に流れ込んでいる。すぐ東の中里八幡宮の別当・多門坊は神社に近接していた。



須津湖句碑 静岡県富士市中里
句の作者・斎藤応輔は備前（岡山県）生まれで、碑を建てた明治33年には富士郡加島村の高島（富士市高島町）に住んでいた。



西池（宮組池） 静岡県富士市中里
絵図から江戸時代中期には存在したこと
が確認できる。



14須津湖句碑拓影

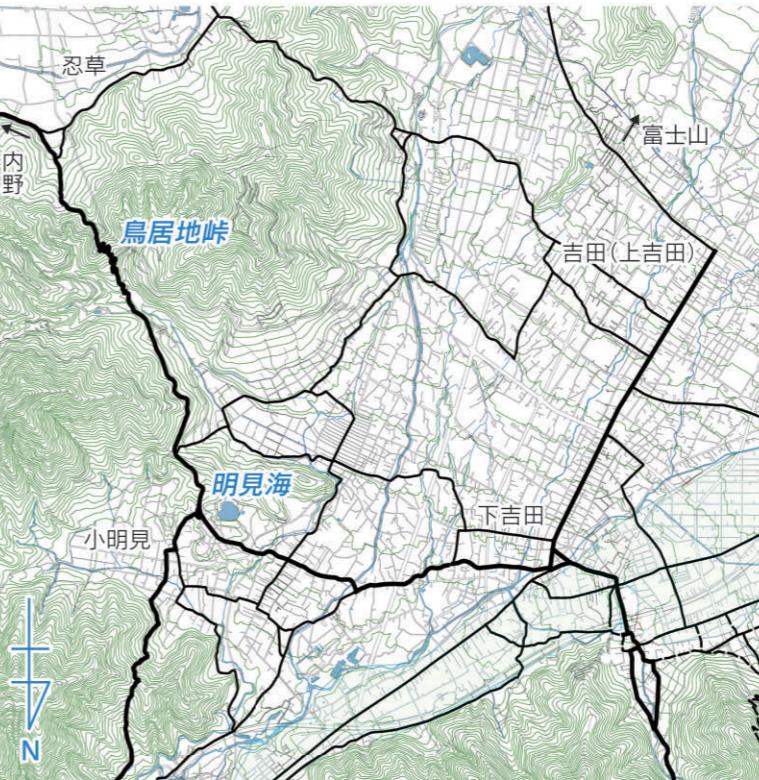
原碑造立：明治33年（1900）
全高93.5cm、全幅53.5cm

東方から明見海へ

鎌倉道を山中海方面から吉田へめぐる富士山の道者は、峠を越えて明見海（明見湖、富士吉田市小明見）に出た。このルートは『甲斐国志』に「古道」として、明見海から「二王坂」（仁王坂）、「鳥ウチ峠」を越えて内野（忍野村）を経て山中海の北岸を通り、平野（山中湖村）からヅナ峠越えで駿河の日向（静岡県小山町中日向）に至ると説明される道である（卷53）。「鳥ウチ峠」は明見側では鳥打峠、内野側では鳥居地峠と呼んだ。資料15の「富士大権現」の額は、この峠に立っていた鳥居に掲げてあったとされるものである。東方から富士山を目指す道者は、この鳥居をくぐり明見海に至った。

明見海は『甲斐国志』に「小明見村の南にある小池」とあり（卷35）、宝暦9年（1759）の「小明見村明細帳」にも「小池」と記されている。嘉永4年（1851）の村明細帳は「湖」としているが、その規模は宝暦以来、長さ100間（約182m）・横80間（約145m）ほどとあるので湖としては小さい。湖畔には御師の宮下善左衛門が住んでいて、明見海の祭祀を司っていた。付近からは水が湧き出でて、そこで道者は垢離を搔いた。大坂から来た芙蓉亭蟻乘（p18）は、明見海に浸かって水行した際、蛭がたくさんいて、全身に吸い付かれたと述べる。明治42年（1909）の『南都留郡誌』には、明見海は湖底がすべて泥で水は清らかでなく、「近時」は養鯉池にして、蓮根を栽培していたとある。大正初年に八海を巡った文人・大町芳衛（桂月）は、湖面の半ば以上は蓮で埋められ、水深が浅く、泥が非常に深いので泳ぐ者は必ず溺死する、と当時の明見海の状態を伝えている（『絵入訓話』）。

かつて明見海のほとりに祀られていたという薬師如来像が常在寺（富士河口湖町小立）に伝存する。明見海にあった時、西方にある寺に納めよ、とのお告げにより寺に安置したとの話が伝わり、その後、明見で疫病が流行したため明見海へ戻されたという。そこから再び寺に納められるまでの経緯は不明である。薬師如来像として伝来するが、本来は善光寺式の阿弥陀三尊像の中尊として造立されたものである。



鳥居地峠・明見湖地図

国土地理院基盤地図情報（道路線、水域、等高線）に加筆した。その際、富士山を上方に示すため、南北を逆転させた。（村石真澄作図）



15鳥居額「富士大権現」

浅間神社（忍野村忍草）蔵

正徳3年（1713）

忍野村指定文化財

縦100.0cm×横53.0cm

正徳3年6月に、江戸の本郷春木町一丁目（東京都文京区）の伊右衛門・三左衛門・喜平次が奉納したもの。額字の揮毫は僧正常然である。この額が掲げられていたという鳥居地峠の鳥居は、大明見の御師・柏木家が祀っていたと伝えられる。



16金銅薬師如来立像

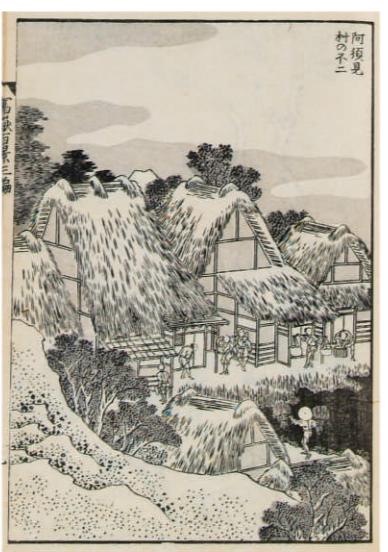
常在寺（富士河口湖町小立）蔵
鎌倉時代 富士河口湖町指定有形文化財
像高47.9cm

かつて明見海の湖畔に安置されていたという伝承を持つ。薬師如来の姿に表わされるが、台座の形式などから本来は善光寺式阿弥陀如来像で、両脇侍（觀音菩薩・勢至菩薩）を従え、三尊を包み込むように大型の光背を付けた一光三尊形式だったと考えられる。本体・台座とも一铸で、両手首から先は後補である。



一光三尊阿弥陀如来像 大乗寺藏

静岡県御殿場市仁杉（ひとすぎ）の大乗寺の本尊。秘仏である信州善光寺の阿弥陀像を模しているので「善光寺式」という。中尊の阿弥陀如来は立像で、右手は施無畏（せむい）印、左手は小指と無名指を曲げる刀印を結ぶ。

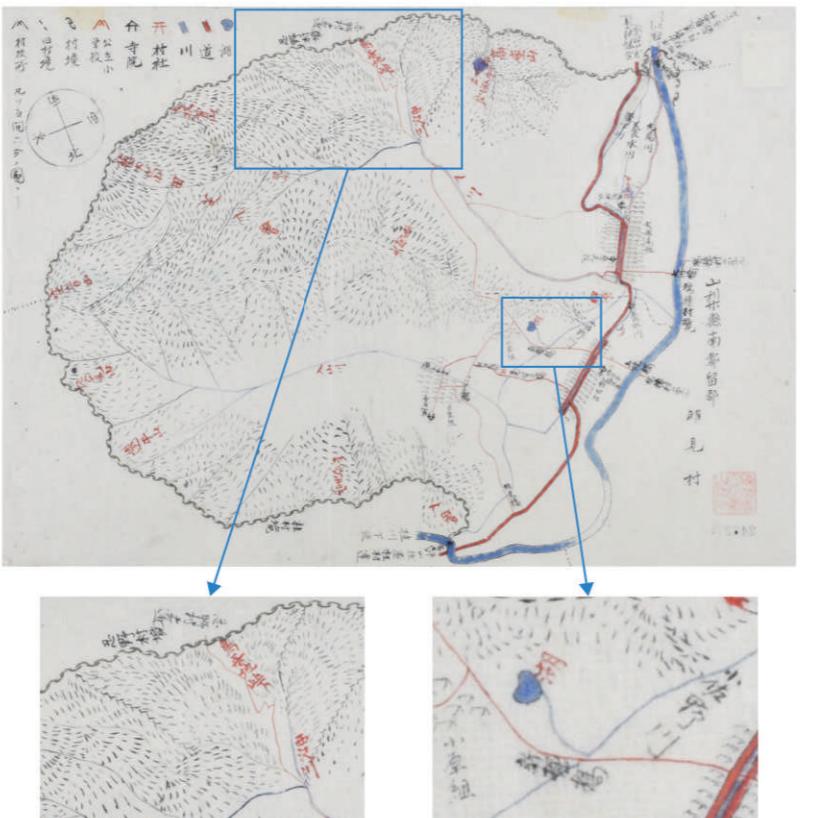


17葛飾北斎画「阿須見村の不二」
（『富嶽百景』三編）

山梨県立博物館蔵

天保6年（1835）以降

葛飾北斎の『富嶽百景』は初編が天保5年、二編が翌6年、三編は刊行年不明であるが、二編から時を隔てずに発行されたと思われる。三編に明見村が描かれており、家屋の奥から富士山がわずかに見える。これは、富士山出現の時に、明見村の者だけ「明日、見ればよい」と、その日のうちに見なかつたため、地面が盛り上がり、富士山が見られなくなつたという伝承を踏まえていると思われる。



18南都留郡明見村略図

明治14年（1881）

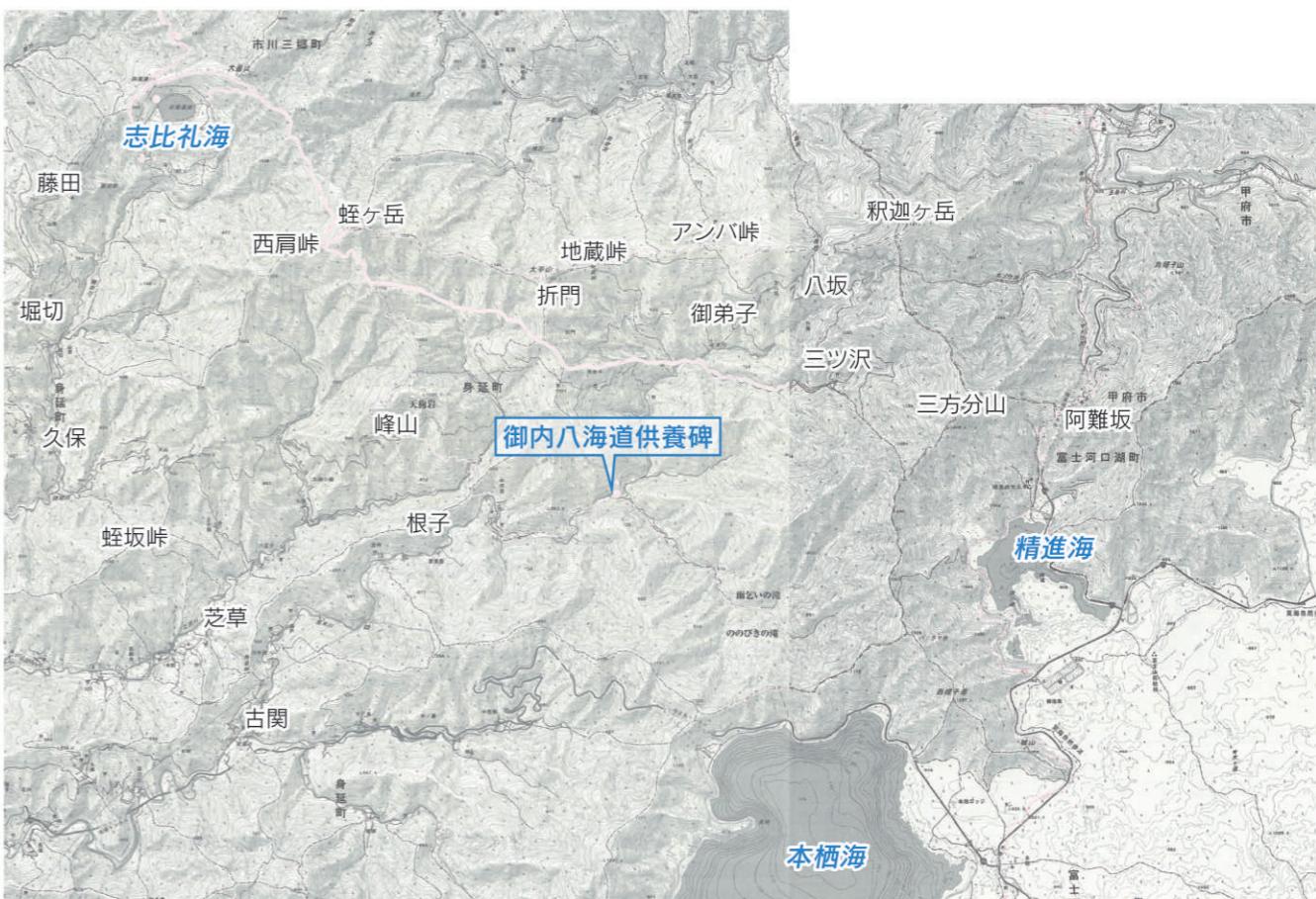
上を南とする地図。「鳥居地峠」から「新堀橋」へ下ると、左手に「湖」（明見海）へ入る道がみえる。

精進・本栖から志比礼海へ

志比礼海（四尾連湖、市川三郷町）へ巡拝するには、精進海（精進湖）や本栖海（本栖湖）方面から険しい山道を行かなければならなかった。精進海からはまず阿難坂（女坂）を甲府方面に上り、途中、三方分山を目指して西に折れる。その後、尾根づたいに釈迦ヶ岳・八坂峠・アンバ峠・地蔵峠・折門峠と進み、蛭ヶ岳から下る。一方、精進海の北西から三ツ沢峠を越えて八坂・御弟子・折門の集落を抜け、蛭ヶ岳の西の西肩峠を目指す道もあった。

文政6年（1823）、芙蓉亭蟻乘は本栖海から志比礼海へ巡拝した（p18-19）。その道は「難所」が多く、「いこうべき茶店」もないと聞いて、馬を雇っている。帰りも本栖海へ出た。芙蓉亭が通った具体的なルートは明らかではないが、彼が信奉する「不二孝」（不二道）を開いた小谷三志も、文化5年（1808）、本栖海から志比礼海へ参った。そのルートは、本栖海北岸を西進、古関から芝草へ出て、蛭坂峠を越え久保へ下りる（いずれも身延町）。そして堀切・藤田（いずれも市川三郷町山保）の集落から志比礼海に至っている。道程は9里（約35km）余りとあるので、芙蓉亭が6里（約23.5km）と記したことによると遠回りになる。また三志は本栖からの「ねつこ（根子、身延町）越」の道があることを示している（「裾野八湖。豆州修行記」）。この根子に宿泊したのが大正初年に八海巡りをした大町芳衛（桂月）である。本栖海北畔から反木峠を越えて根子の集落に入り、「旅店」に投宿する。そこは「部屋というよりもむしろ物置」といった風情で、宿泊客も年間数十人という。宿の息子のオルガン、蒸し暑さ、蚤の多さに閉口しながら、翌日は峰山（身延町大磯小磯）から蛭ヶ岳を越えて志比礼海に着く。帰りは反木峠を下り、本栖海から足を延ばして精進海へ宿を取った（『絵入訓話』）。

現在、根子の字山伏屋敷に「御内八海道供養」碑が立つ。大磯小磯村の「講中」の岸右衛門・小左衛門が「本願人」となり、50両以上の寄付金を集め、嘉永元年（1848）8月に建立したものである。寄付者には市川大門村（市川三郷町）の富士講・大我講の講員と思われる者もいる。大我講は同村の大寄友右衛門（兌孝）が始めた講で、天保14年（1843）に忍草の八海（忍野八海）を「再興」したことで知られる。険しい山道の志比礼海に至るルートでは、行き倒れてしまう道者もいたのだろう。供養碑は甲斐河内地方の富士講の活動を今に伝えている。





「御内八海道供養」碑 身延町根子
身延町指定文化財

道路の改良などで長らく所在が不明となっていたが、平成16年（2008）に土砂の中から発見された。同年、御内八海道供養碑奉賛会が結成され、県道416号折門古関線の傍らに再建された。



19 「御内八海道供養」碑拓影

原碑造立：嘉永元年（1848）
全高138.0cm、全幅95.0cm



供養碑を左に見て道を奥に行くと、三ツ沢の集落を経て、嵯越えで精進海に至る。

尾崎龍王碑

志比礼海の北西岸には嘉永7年（1854）7月7日に造立された尾崎龍王碑がある。碑正面の「尾崎龍王」の字は、大我講の大寄友右衛門筆という。碑が立つ場所には龍神堂があった。古くから志比礼海では、大掛かりな雨乞行事が行われ、江戸時代、この龍神堂の傍らに市川代官の屯所が置かれたという。大町芳衛（桂月）は志比礼海に来て、龍神堂の側で昼食を取っていたところ、男ばかり数十人が尾崎龍王碑を拝み、列になって湖を廻るのを見た。老壯者が「湖の上の黒雲」と唱えると、少壯者が「負けちゃった、負けちゃった」と和し、これをくり返すという雨乞行事の様子を伝えている。この雨乞祈願でも降らない場合は牛の頭を湖水に浸し、それでも降雨がないと牛の頭を切って湖に投げ込んだという（『市川大門町誌』）。龍神堂は昭和に入って焼け、碑だけが残された。



大坂の芙蓉亭、内八海に行く

江戸時代後期、大坂に住む芙蓉亭蟻乘（本名未詳）は、鍛冶職で狂歌師として的一面も持っていた。祖父は若い頃から富士登拝の願望を持っていたが病気がちで果たせず、芙蓉亭本人は、食行身禄の教えを継ぐ武藏鳩ヶ谷（埼玉県川口市）の小谷三志が開いた「不二孝」（不二道）に帰依する。そして、文政6年（1823）に念願の富士登拝に出発する。

東海道を吉原宿まで進む間、彼は何度か水行をする（水垢離を搔く）。最初は琵琶湖の南西端の石場（滋賀県大津市）で道中の安全を祈願して「瀬水」に身を浸す。その後は石部宿（滋賀県湖南市）で水行、宮（名古屋市熱田区）の浜では潮垢離を搔き、天竜川を渡った岸辺でも水行をする。東海道を離れた後は白糸ノ滝で水行、甲斐に入つてからは本栖・川口・明見の湖で水行、登拝後は山中海で垢離を搔く。そして籠坂峠を越え、沼津で大雨による川留のため何日間か逗留する。当初は東海道を西進して大坂に帰る予定だったと思われるが、宿で「寝たり起きたりを重ねるのは無益で、川もいつ開くのか分からぬ」と、中山道の木曾方面へ行くことを思い立つ。そして雨の中、宿の主人が危険だからと止めるのも聞かず出発する。再び根原から甲斐に入った芙蓉亭は、本栖・志比礼・精進の湖で垢離を搔き、中道往還を甲府に抜けるのである。

江戸を中心とする身禄派の富士講では形式的な垢離（外清浄）よりも内心の穢を払うこと（内清浄）を重視するが、芙蓉亭は富士垢離（p 8）が盛んな西国から来た。彼の東海道中や内八海での水行は、東国と西国それぞれにおける富士講の考え方の違いを示している。

文政6年（1823） 芙蓉亭の内八海巡拝

①6月11日 「元須湖」

前日は人穴村（静岡県富士宮市）泊まり。この日、本栖関所を通り、本栖海で水行。深さがあつて「すごし」と感想。

②同日 根場（富士河口湖町西湖）

渡辺源右衛門方に宿を取る。

③6月12日 「西の海」

十二ヶ岳の半ばまで登り、西海北岸の山を打越し、西湖村（富士河口湖町）百姓宅で休憩。水行はしていない。

④同日 「川口湖」

法華堂前（富士河口湖町小立）の芝生で休憩。船津（富士河口湖町）で水行。底が深くて「ものすごし」と感想。

⑤同日 吉田

御師・小沢伯耆（团扇屋）に宿。

⑥6月13日 「明見の湖」

明見海で水行（p13）。船津胎内を訪れる。小沢泊。

⑦6月14日～16日 富士山

15日の登頂後、悪天候で八合の室に泊まり、翌日下山。小沢泊。

⑧6月17日 「山中湖」

新屋（富士吉田市）から山中村（山中湖村）に至り、鳴海屋太兵衛方で休憩。「行場」へ行き水行。

⑨同日 中山（静岡県御殿場市）

百姓宅に宿を取る。

⑩沼津（静岡県沼津市）

間屋伊右衛門方へ泊まる。大雨で川留となり逗留（期間不明、以後、日付を明示せず）。木曾を経由することを思い立つ。

⑪「須度ノ湖」

雨中、沼津を発ち、浮島ヶ原を通る。原中の沼を須戸海と認識（p11）。水行はせず。

⑫吉原（静岡県富士市）

四ツ目屋に泊まる。

⑬大宮（静岡県富士宮市）

高橋屋藤右衛門方へ宿を取る。

⑭根原（静岡県富士宮市）

風雨をしのぐため「あやしの家」に一宿を乞う。

⑮「志尾礼の湖」

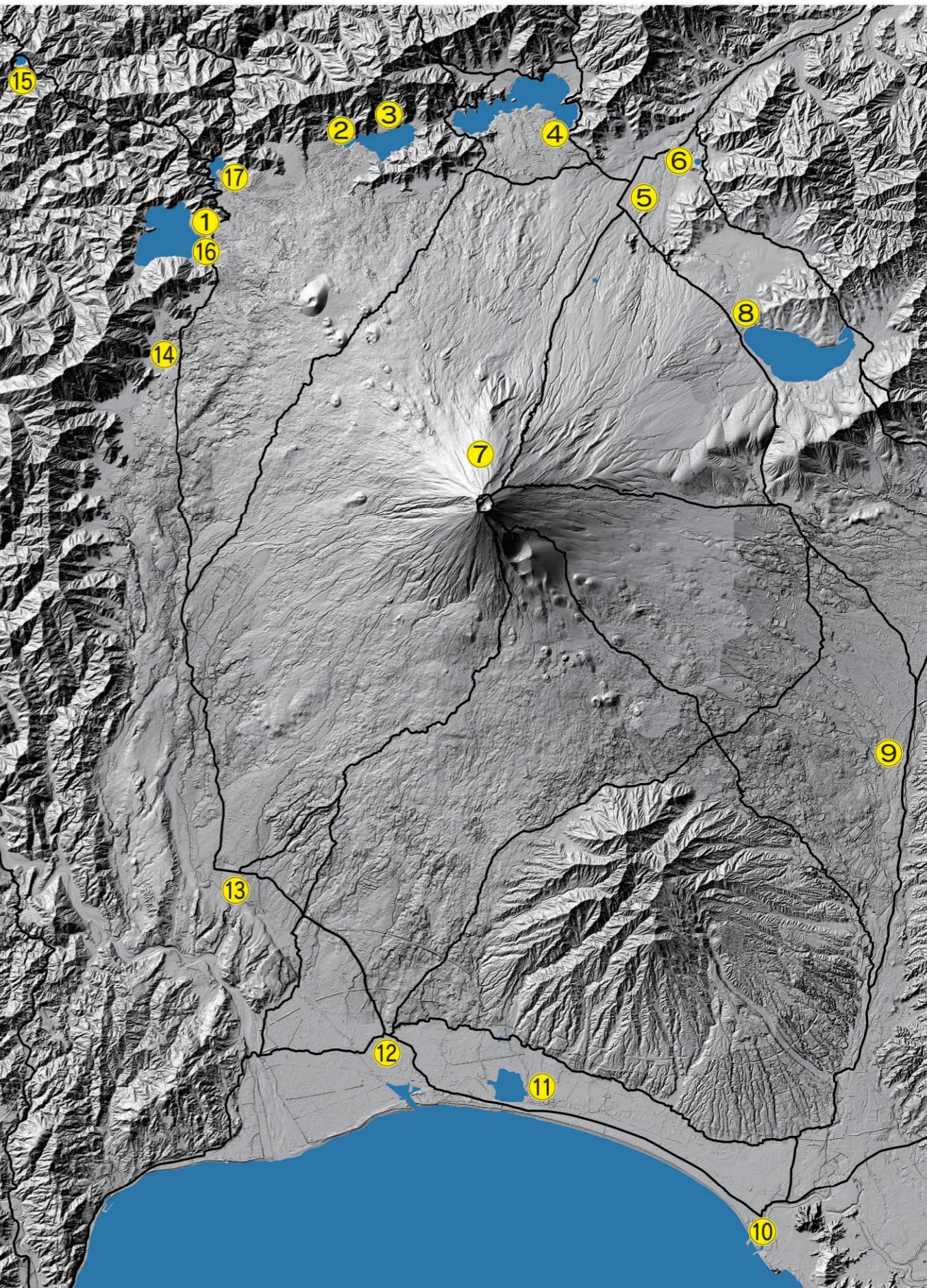
再び本栖に至り、馬を雇って志比礼海に赴く。湖面に鳥居が立っていて、そこから入って水行。向こうの深みに蛇のようなものが鱗を立ててうごめくのを見る。驚いて水から上がり、馬子に聞いたところ、10日ばかり前の雨乞で沈めた作り物の大蛇という。この日は馬子の家に泊まる。

⑯「元須の湖」

朝、本栖海に着き再び水行。それから甲府を目指す。

⑰「精進の湖」

富士八海の内で、「行場」であるということで垢離を搔く。それから中道往還を行き、甲府柳町に至る。



国土地理院「陰影起伏図」に加筆した。（村石真澄作図）

湖上の巡拝路

内八海のなかでも面積が広い湖には舟が行き交っていた。『甲斐国志』は、精進海や本栖海での丸木舟の使用を述べており（巻42）、芙蓉亭蟻乗も、同じく丸木舟が西湖の湖上を通っていたのを見ている。これらの舟は湖辺の住人が日常の交通や漁労などに主に使っていた。明治27年（1894）の山中海では、「荷積船」1艘と「漁船」9艘が数え上げられている（島崎博則編『山梨県市郡村誌』下巻）。

富士道者も舟を使う場合があった。御坂峠を下ったところにある川口（富士河口湖町河口）には、寺川の川尻に「舟着場」があった。そこから船津の豊岩の辺りに舟は着く。近隣には水行場があった。明治17年に、長野県上伊那郡上片桐村（松川町）から富士山に登拝した森下田七郎は、「川口船ちん」として2銭を支払っている（「富士登山日記簿」）。御坂峠を越える道者は川口～船津の渡船を多く利用したのだろう。富士山麓の観光化が進んだ昭和初期、船津に本社があった河口湖西湖遊覧渡船株式会社のパンフレットをみると、船津から大石・長浜（ともに富士河口湖町）、それに小海（富士河口湖町勝山）に至る船便があつたことが分かる。長浜は川口海の湖上交通の一拠点で、地内の貴船神社には舟の安全を願って参詣する者が多かったという。「遊覧船」のルートも、古くから道者や地元の住人が利用した船便を基に設定されたのだろう。川口海に浮かぶ鷲鷹嶋（鶴ノ島）には鷲慈嶋神社が鎮座し、湖辺の住人が小舟で参詣した。文化5年（1808）には、不二孝の小谷三志が大石から舟で上陸して通夜を行った。三志はまた、川口海では舟に乗る時、「臼杵」の話を忌むという習俗を伝えている（「裾野八湖・豆州修行記」）。

相模小田原の富士講・東講は幕末・明治に内八海修行を執り行った。安政5年（1858）には、西湖で舟を利用し、青木ヶ原に着き、「龍神」（龍宮）に参詣した。小谷三志は西湖村（富士河口湖町西湖）から出る船便は、精進海へ直接行く者のために根場（同）に着くルートと、「龍根」（龍宮）へ上がるルートがあり、船賃も違うとしている。大正初年には大町芳衛（桂月）が志比礼海を訪れた後（p15）、舟で精進海を渡り、さらに根場から西湖、長浜から川口海を渡り、船津で昼食を取り、明見湖に足をのばしている（p13、『絵入訓話』）。湖上を行く船便は、陸路とともに道者にとって大事な巡拝ルートで、後々には観光客の輸送にも一役買うのである。

河口湖西湖遊覧渡船ト自動車連絡時刻表												
御注意	西 湖											
	船津着	長濱發	徒步	西湖着	根場發	根場着	精進發	精進着	根場發	根場着	西湖發	長濱發
七、八月ハ全部運轉	八五	八五	二五分	八〇	七〇△				八五△	八五	八五	七〇
四、五、六、九、十、十一月と△印ノミ運轉	一〇三	九五	三〇分	九五	八五〇	一〇五	八四	八一〇	一〇〇	九五	九五	八五〇△
	一一四	一一〇	二五分	一〇三五	一〇五五	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇△
	一〇五	一一五	二五分	一一二〇	一一四五	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇	一一〇△
	三一〇	二四	三〇分	二一〇	二一五	二一〇	二一〇	二一〇	二一〇	二一〇	二一〇	二一〇△
	四四〇	四〇	二五分	三三五	三〇五△	四四〇	三〇〇	三三〇	五〇〇	四三〇	四二〇	四二〇△
	六二〇	五五	二五分	五〇〇	四三五	六二〇	四三〇	五五〇	六三五	五四〇	五四〇	五四〇△
	七二〇	六四	二五分	六一五	五四五△	七二〇	五四	七一〇	七一〇	六一〇	六一〇	六一〇△

「富士五湖 河口湖西湖御案内」（部分）

昭和初期

河口湖西湖遊覧渡船株式会社が発行した観光パンフレットに掲載される船津から精進までの時刻表の部分。富士山の観光化が進む中で、内八海にも遊覧船が運航されるようになったが、以前からの湖上の巡礼路を踏襲するルートもあった。上の時刻表にある通り、船津～長浜、西湖～根場が船便で、長浜～西湖は徒歩、根場～精進は自動車で連絡した。船津～精進の所要時間は最速で2時間10分であった。



個人蔵



20大嵐村外六ヶ村絵図

天保8年（1837）

大嵐・成沢・長浜・勝山・小立・船津・浅川各村（成沢のみ鳴沢村、ほかの各村はすべて富士河口湖町）を含む絵図。南の富士山を上にして、下に「湖水」（川口海）を大きく描く。剣丸尾と雪代堀が目立ち、入会場も明示してある。裏書によると、「郷村絵図面」の提出を幕府に命じられ、各村を色分けし、村・郡・国の各境を記したという。絵は中村右近が描いた。湖面には舟が6艘見える。産屋ヶ崎の沖を行く舟は、川口と船津とを結ぶ渡船だろうか。



富士河口湖町大嵐区蔵
縦147.8cm×横173.6cm



21「舟中ヨリ富士望ム」絵葉書（「河口湖風景」）

個人蔵
年未詳
縦9.1cm×横14.0cm

船津を目指す舟から見える風景。



22「船津乗船場」絵葉書

個人蔵
年未詳
縦9.1cm×横14.1cm

船津は川口海における湖上交通のターミナルであった。



23



24

23「甲斐河口湖の富士」絵葉書

個人蔵
年未詳
縦9.1cm×横14.1cm

川口海・西湖を行く舟。こうした舟は地元の住人が日常の行き来や漁に使っていたと思われるが、道者を乗せて運んだ可能性もある。

個人蔵

年未詳
縦9.1cm×横14.1cm

企画展「富士八海を巡る」展示資料

No.	資料名	年代	所蔵者	掲載頁
1	富士浅間太神掛物	年未詳	個人	3
2	河村岷雪画「大石 郡内」(『百富士』第二冊)	明和4年(1767)	個人	3
3	「富士山縁起」	弘治4年(1558)	個人	4
4	「御大行之巻」(写本)	書写年代未詳	北口本宮富士浅間神社 (ふじさんミュージアム寄託)	6
6	富士講「鯉奉納」碑拓影	原碑:享和元年(1801)	原碑所在:山中湖村山中	7
8	泉津富士講碑拓影	原碑:寛政12年(1800)	原碑所在:富士吉田市上吉田	9
9	「駿河柏原沼ノ富士」絵葉書	年未詳	個人	10
10	二万分一地形図「鈴川」(陸地測量部)	明治35年(1902)	個人	10
12	「富士山禪定図」	天明年間(1781-89)	個人	11
14	須津湖句碑拓影	原碑:明治33年(1900)	原碑所在:富士市中里	12
15	鳥居額「富士大権現」	正徳3年(1713)	浅間神社(忍野村忍草)	13
16	金銅薬師如来立像	鎌倉時代	常在寺(富士河口湖町小立)	14
19	「御内八海道供養」碑拓影	原碑:嘉永元年(1848)	原碑所在:身延町根子	16
20	大嵐村外六ヶ村絵図	天保8年(1837)	富士河口湖町大嵐区	21
21	「舟中ヨリ富士望ム」絵葉書(「河口湖風景」)	年未詳	個人	21
22	「船津乗船場」絵葉書	年未詳	個人	21
23	「甲斐河口湖の富士」絵葉書	年未詳	個人	21
24	「甲斐西湖の富士」絵葉書	年未詳	個人	21
25	内八海・外八海修行写真映像	平成27・28年(2015・16)	個人	22・23
26	行衣	現代	個人	23
27	焚符	現代	個人	23
28	「おつたえ」(扶桑教大教府発行)	年未詳	個人	—

パネルによる展示

5	「角行藤仏記」	書写年代未詳	山梨県立博物館	6
7	「伊勢国道者帳」	安永2年(1773)	個人	9
11	「御山名所道之記」	江戸時代中期	個人	11
13	「駿州吉原宿絵図」	文政10年(1827)	個人	11
17	葛飾北斎画「阿須見村の不二」(『富嶽百景』三編)	天保6年(1835)以降	山梨県立博物館	14
18	南都留郡明見村略図	明治14年(1881)	山梨県立博物館	14

山梨県立富士山世界遺産センター

令和3年度 第1回企画展

富士八海を巡る

協力者(順不同)

秋山晃一、伊藤昌光、加藤信子、北出正之、斎藤義次、萱沼安孝、村石眞澄、望月洋子、米山芳子、渡辺稔、忍野村教育委員会、御前崎市教育委員会、川口市教育委員会、常在寺、浅間神社(忍野村忍草)、大乗寺、富士河口湖町大嵐区、富士河口湖町教育委員会、北口本宮富士浅間神社、ふじさんミュージアム、富士市立図書館、山中湖村教育委員会、山梨県立博物館

本誌は企画展「富士八海を巡る」(令和3年7月22日～9月27日)の概要を紹介した展示解説です。展示物以外の資料や景観などについても写真を掲載しています。写真解説に付した算用数字は、展示資料の資料番号です。執筆・編集は、当センター調査研究スタッフ(金子誠司・堀内亨・堀内眞・根岸崇典)が担当しました。

令和3年(2021)7月22日発行

編集・発行 山梨県立富士山世界遺産センター

〒401-0301

山梨県南都留郡富士河口湖町船津6663-1

TEL 055-72-2314

印 刷 株式会社 少國民社

〒400-0851

山梨県甲府市住吉1-13-1

TEL 055-226-2125